

No. 512【2022年7月8日配信】

昔話「里見の稲荷」(担当:工藤大輔)

こんにちは！ 室長の工藤です。

先日、立川志の輔さんの落語「こぶとり爺さん」を聴きました。大変面白く聴いたのですが、私は昔話の「こぶとり爺さん」を知りません。いや、そもそも昔話自体をあまり知らないのです。幼い時に「本を読む」ことをしてこなかったことがいけなかったのでしょうか…。ちなみに、「泣いた赤鬼」に感動したのは大学生の頃でした。

さて、かつてのテレビ番組「まんが日本昔ばなし」で「里見の稲荷」という昔話が紹介されていたのはご存知でしょうか。今から40年前、昭和57年(1982)1月2日に放送されたとのこと。

お話の舞台は「青森の里見」という所で、「窪田の旦那」と呼ばれる庄屋さんが登場します。内容の詳細は割愛しますが、里見の「稲荷」の由緒にまつわるストーリーとなっています。ただ、このお話がいつ、どのような背景で成立したのか分かりません。語り伝えられてきたものではなく、番組のために新たに創作されたのかもしれない。しかし、ふたつの事実を確認することができます。

ひとつは、「里見の稲荷」は中央1丁目に実在すること。そして、もうひとつは里見村には「窪田」という有力者がいたということです。由緒書によれば窪田家は4代目から三郎右衛門を代々名乗っています。由緒書では4代目の三郎右衛門は貞享3年(1686)頃に外浜の漁師の束ねである「外浜漁師頭」となっています。弘前藩庁の記録には、この頃の漁師頭に窪田佐右衛門という人物が出てきます。両者が同一人物であるとすれば、彼の漁師頭就任は数年さかのぼる可能性があります。

さらに由緒書によれば、この三郎右衛門は大野・浦町・堤・勝田・浜田・荒川・沖館の7か村で新田開発を行い、後に藩庁から「里見新田頭」を命じられています。新田開発についてはやはり藩庁の記録からも確認できます。また、県立図書館にはこれと関係づけられそうな絵図があり、以前このメールマガジンでも紹介しました(2020年12月4日配信No.434)。

ところで、「里見村」という名称は元文元年(1737)、2代目(窪田家5代目)の三郎右衛門のときに付けられたようです。そして翌年、稲荷神社が「里見村中」によって再建されています。『青森市史』第10巻社寺編は、稲荷神社の再建と新田開発との関連を指摘しています。これにしたがえば、「里見新田頭」であった窪田三郎右衛門と稲荷神社の再建は繋がってきそうです。

こうしてみると、昔話「里見の稲荷」は17世紀末～18世紀初めの歴史的事情を踏まえたストーリー設定であるとみていいでしょう。



里見稲荷神社(中央1丁目)